

## お わ り に

本校が、「『学びを拓く』生徒の育成」をテーマに研究実践を始めて三年になります。この間、「基礎・基本の定着を図る教科指導のあり方」に視点をあて、各教科における基礎・基本の明確化、基礎・基本の定着をめざした指導の工夫・改善、基礎・基本の習得をめざした学習活動の評価など、教科によって内容や程度に多少差異はありますが、一定の取組がなされたものと考えております。

私たちが本研究実践を進めるのとほぼ時を同じくして、義務教育段階における「確かな学力の定着」が多くの国民の関心事となりました。一昨年十二月に公表された一連の国際学力調査の結果に関する報道が、国民の学力低下への不安を増幅させ、学力低下論争が各方面において活発に展開されましたが、結局、この学力低下論争により、国民の教育への関心は喚起され教育の流れが変わったことや、学力検査の重要性が再確認されたこと、各都道府県が学力向上への取組を積極的に実施したことなど、私たちの予想をはるかに超えた新たな動きが生じたように思います。こうした状況の中、本校の取組は、どのような教育を展開し生徒にどのような学力をつけさせるかについて確認しながら、教科指導を中心に「確かな学力の定着」をめざした研究実践であったと言えます。そして今、私たちは、めざす学校像や生徒像などを視野に教育目標を明確にし、教育目標を具現化する教育活動を通してその達成度を検証し、課題解決に取り組み教育の質を保証するという一連の取組をいっそう推進していくことが重要であると考えています。

今回の「基礎・基本の定着を図る教科指導のあり方」という研究実践を通して見えてきたことのひとつに、小学校と中学校との連携を重視した教育という問題があると思います。中学校と小学校が、教師間による単なる情報交換だけでなく、十分な教育活動の交換を進めていくことで、「規則正しい生活をする」「困難なことに挑戦する」「自己理解を深める」「意欲的な学習姿勢を身につける」「家庭での学習習慣を身につける」といったことが、小学校段階においてより形成されやすくなると思います。このことが、中学校段階において、生徒一人ひとりが確かな学力を身につけるうえで大切な条件であることを考慮し、今後隣接する附属小学校との連携が進めばと期待するところです。

多忙極まる本校教員の日々の教育活動への姿勢とその実践内容を見ておきますと、学校教育の充実が教師の意識改革や資質向上によるところが大きいと痛感いたします。昨年の中教審答申「新しい時代の義務教育を創造する」では、「優れた教師の条件」について、「教職に対する強い情熱」「教育の専門家としての確かな力量」「総合的な人間力」を挙げています。また、こうした資質・能力を高めるには、「学校という組織全体において多様な資質能力を持つ教師集団がチームワークを発揮し、充実した教育活動を展開できる学校文化を築くことが肝要」と指摘しています。こうした指摘を私たちは心に深く刻み、今後とも自己研修を積むとともに、日々の研究実践に努めてまいりたいと考えています。つきましては、本校の取組や教員の研究実践への姿勢等に対し、多くの方々からの忌憚のないご意見、ご指導、ご鞭撻を、何卒よろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、本年度の教育研究協議会を開催するにあたり、和歌山県教育委員会をはじめ、和歌山市教育委員会、和歌山大学教育学部の関係各位、教育研究協議会当日の運営等でご尽力いただきました諸先生方に、心よりお礼申し上げます。

平成18年3月

和歌山大学教育学部附属中学校  
副校長 細田能成